

歴史の中の WEIRD 文化

Google Books に見る個人主義・促進焦点・ルーズネス

竹村幸祐(滋賀大学)・仲間大輔(リクルートマネジメントソリューションズ)

キーワード: 文化変化, WEIRD, 個人主義, 規範, 促進焦点

文化は**歴史的経緯**の中で形成される。文化には経路依存性があり、現在の社会生態学的要因が似ていても、異なる過去を持つ社会には異なる文化が成立することがある(Cohen, 2001)。ある文化的要素が生まれるには、先に満たされるべき条件があるのかもしれない(e.g., Currie et al., 2010)。実際、多くの社会で個人主義化が見られる一方で(e.g., Santos et al., 2017)、その変化は一様ではなく、例えば東アジアの多くの国では変化が小さいとの指摘もある(Bomhoff & Gu, 2012)。文化が、人から人へと伝わる情報であり、その**累積によって**形成されていくものであるならば(e.g., Mesoudi, 2011)、**歴史の中でいかに文化が変遷するか**は文化の本質的問題といえる。

本研究は、文化の歴史的変遷を検討するにあたり、**WEIRD 文化**に注目する。WEIRD とは、社会科学のデータが一部の社会(Western, Educated, Industrialized, Rich, and Democratic)に偏っているとの指摘(Henrich et al., 2010)から生まれた言葉だが、WEIRD な社会が、個人主義や規範のルーズさなど一定の特徴を持つことが知られている(e.g., Schulz et al., 2019)。本研究は、こうした WEIRD 文化を構成する様々な要素に注目し、アメリカ社会の歴史の中でこれらの文化的要素がどのような順序で高まっていったのかを検討する。

方法

先行研究(e.g., Grossmann & Varnum, 2015)にならい、Google Books Ngram Viewer Corpus を用いてアメリカの出版物における文化的要素の変遷を検討した。WEIRD 文化の諸要素のうち、それを捉える単語リストが考案済みの要素に本研究は注目した。具体的には、個人主義(e.g., “Differ”, Grossmann & Varnum, 2015)、個人主義と密接な関係にある促進焦点(e.g., “Attain”, Gamache et al., 2015)、社会規範のルーズネス(e.g., “Freedom”, Jackson et al., 2019)であった。対象期間は Grossmann & Varnum (2015) にならい、1860–2006 年とした。

結果と考察

図 1a に見られるように、どの要素も 1860–2006 年の間に上昇していた。ただし、上昇の仕方には差があった。個

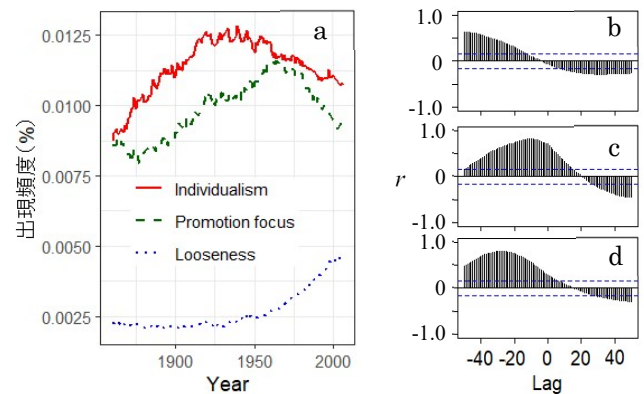


図 1 各要素の歴史的変化(a)と各要素のクロス相関(b 個人主義・ルーズネス、c 個人主義・促進焦点、d 促進焦点・ルーズネス)

人主義・促進焦点は 1950 年前後にピークを迎えて下降していた。これに対しルーズネスは上昇の開始そのものが遅れ、2000 年頃まで上昇が継続していた。

年を単位とした相関($N = 147$)を見ると、個人主義はルーズネスと相関していなかった($r = -.06, ns$)。しかし、図 1b に示すように、時間差(ラグ)を入れた相関(クロス相関)では、ラグによって相関係数に大きな違いが見られた。特に顕著なのは、ラグ 40 年あたりの正の相関で、これは、ある時点での個人主義が、約 40 年後のルーズネスと正の相関を持っていたことを示しており、個人主義が高まることでルーズネスが高まるという可能性を示唆している。

個人主義と促進焦点の間には正の相関($r = .71$)が見られた。さらに、この相関はラグ -10 年あたりでより強くなっており(図 1c)、個人主義が、同時点での促進焦点よりも約 10 年後の促進焦点と相関しやすいことを示している。

促進焦点とルーズネスは正の相関を持ち($r = .28$)、この相関はラグ -30 年あたりでより強くなっていった(図 1d)。

総じて、個人主義が他の 2 要素に先行し、次に促進焦点、そして最後にルーズネスが高まるパターンが確認された。この結果は、社会の規範が弱まることで個人の束縛が緩む(すなわち個人主義が高まる)のではなく、逆に、個人からのボトムアップなプロセスで社会規範の弱化につながる可能性を示唆している。